

紫蘇染めの晒木綿

寒川靖子

春眠暁を覚えずというが、醒めやらぬ眠りの中で私は寸分の乱れもないその音に耳を澄ましていた。右耳は十年余り前に発症の突発性難聴から充分には聞きとれぬはずが、その音は両耳にはっきり聞こえる。

ああ そうだ あの音だ と。

そこで目が醒める。春とはいうものの冷気を覚える。枕元の時計は午前四時前を示していた。

その音は行軍の兵隊が進む軍靴の音だった。

太平洋戦争も未だ戦果をあげていた頃、高台の生家の坂下を通る街道は、陸軍が行軍の道でもあった。県境の山脈を越えて足音も勇ましく銃を担いで進む兵士の列を、私達山里の子は畏敬の眼で見送った。

私は国民学校の低学年だったが、時に臨時休校があった。それは行軍の途中に、兵士の宿舎とし全教室が当てられるためだった。

その間も、兵隊の演習が続いた。近くの山林から伐採の木で丸太を作り、校門の前を流れる大川に橋を架けると、鉄かぶとに雑木の枝を刺した兵士が銃を抱くよう



さんがわ やすこ

一九三五年香川県三豊市（現・財田村）生れ。短歌結社「一路」「香蘭」から女流詩誌「ラメール」（代表・故古原幸子、新川和江）を経て現在に至る。青焰の会、芸象文学会、明治神宮献詠会、日本歌人クラブ所属。著書…詩集十冊、歌集二冊、句集二冊、随筆集、創作集、小説集、合同歌集、随筆アンソロジーなど。

にして這っている姿が見えかくれした。

そんな時、わが家は部隊の将校と下士官の宿泊所になるのが常だった。士族の屋敷は広く部屋数も多かった。座敷には将校が、次の間に下士官達、他の部屋にも何人かの兵士が出入りする日は一週間から十日に及ぶこともあった。

国民の全てが勝利を祈念し、軍隊の役に立つは努めであり誇りであった時代である。

役所勤めの父をはじめ町の中学校（旧制）に通う兄も祖母も母も私も願いは同じだ。兵士が寝泊まりする間は家族それぞれが心せわしく過したが、中でも母は多忙を極めた。大勢の兵士の寝具、入浴から食事など、夜明けから夜更けまで母は働いた。それでも寸暇をさいて母はもう一つの作業をしていた。

ハンカチ大に裁った晒木綿の白布を、紫色の梅酢に浸して陽に乾かしたまた浸して干すというくり返しの作業である。築山の木々の上に広げた布は二十枚もあったと思う。

白布は紫蘇の色から濃紫になり、やがて黒に近い色にまで染まる。母はそれを一枚一枚丁寧に畳んで鏡台のかたわらに大事そうに置いた。

そうする内に部隊の移動日がやって来た。

その朝、玄関前に整列した兵士は、私達家族に向って敬礼をした。将校の乗馬を待つ馬も到着していた。一瞬、沈黙が過ぎる。

それまで静かに兵士を見ていた母が一步前になると、下士官の一人に重ねた紫色の布の束をさし出していった。

「南方の前線では水や塩が不足すると思います。その時はこの布を口に含んで乾きを防いで下さい。紫蘇と梅の力で唾液も出て来ます。少しでも苦勞の助けになるよう祈っております。体を大切になさって下さい」

頭を下げる母に、無言の兵士の眼に涙が盛り上がるのを私は母の膝元で上眼遣いに見ていた。ふいに胸が詰まって鼻の奥がつーンとして来た。

「ありがとうございます。必ず武運をたててまいります」

布の束を押し戴くかにして兵士は拳手の礼をとった。

空は晴れて青かった。

くつわを取る兵卒を従えて騎乗の将校を先頭に兵隊の列は坂を降りて行く。

「武運を祈ろう」

父の言葉に見送る家族は頭を垂れた。

当時、生家の庭には三十数本の梅の木があった。季節には花が咲き実がとれる。祖母が健在のときは、干し梅に自生の紫蘇を入れて色美しい梅干しを仕上げるのが習わしだった。

国民学校まで数分と近く兵士達が往き来した生家だったが、敗戦から時代に呑まれたといえいいのか逆境に陥ちた。

嫁いで五十有余年、家族に存命は末の兄と私の二人である。いつとなく生家を訪れる機会も少なくなった。

生い茂る木々の築山はまるで森のように見える。それでも庭の広くに紫蘇は育った。太く硬い軸に紫色の葉が密生している。

兵隊のいた時代、手拭いを姉様被りにして働く母は若かった。幼い私は母の後について紫蘇色に染まる布の変化が面白くてそっと指先で触ってみたりしたものだ。

あの布を軍服に納めて戦った兵士はどうしただろうか。熱い戦場に母の志は活きただろうか。食べ物の支えになっただろうか。

生きて祖国にもどって来ただろうか。

豊かに食材があふれる現代に、思いだす紫蘇染めの晒木綿に母の面影が重なる。

それは夜明けの夢に聞く軍靴のひびきと共に、私を遙かな日へ誘い続ける。